

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770036

研究課題名(和文)音楽理論・分析法の自律性と政治性の考察 - シェンカー研究とその周辺を例に

研究課題名(英文)Examining Methodological Autonomy and the Politics of Music Theory and Analysis: Studies of Heinrich Schenker and His Contemporaries

研究代表者

西田 紘子(Nishida, Hiroko)

九州大学・芸術工学研究科(研究院)・助教

研究者番号：30545108

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文): 本研究は、ハインリヒ・シェンカーやその周辺の音楽家による音楽理論・分析、それ以降のシェンカー理論・分析における方法論的特徴や価値観を分析し、戦前ドイツと戦後アメリカの音楽理論学界の諸特徴を学術文化の事例研究として明らかにした。シェンカーと同時代の音楽理論家としてF. イェーデやG. ベッキングをとり上げ、視覚化の観点から同時代性を拾い出した。また、シェンカーにおいて演奏法上の特徴が理論・分析的観点といかに関連しているのかも調査した。戦後アメリカについては、リズムの観点から代表的なシェンカー研究者の学術的欲望に迫ると同時に、シェンカー死後から現在までの理論・分析に観察される方法論を歴史化した。

研究成果の概要(英文): In this study, the methodological attitudes inherent in theories and analyses by Heinrich Schenker and others were examined. The findings revealed certain characteristics in prewar Germany and postwar America that enabled a case study of academic culture. The theories of Schenker's contemporaries, Fritz Joede and Gustav Becking, were surveyed, and their affinities were pointed out according to the visualization of musical parameters. Furthermore, the relationship between Schenker's performance theory and his musical theory and analysis was a focus of this study. Regarding the postwar period, the academic tendencies observed in rhythmic theories by representative Schenkerians were compared; additionally, various methodologies of theory and analysis since Schenker's death were historicized.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽理論 音楽分析 ハインリヒ・シェンカー シェンカー分析 方法論 作品解釈 演奏法

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年のアメリカにおける音楽理論

第2次世界大戦後、シェンカー分析は様々な形で応用されてきており、現代の一般的な音楽理論・分析研究においても、シェンカー分析のメソッドにひととおり通じていることが欧米圏の音楽学・音楽理論においては久しく常識となっている。また、こうした分析の応用・発展への批判的意識から、主として1980年代以降には、シェンカー自身やその同時代人の思想に関する研究も活発に行われており、シェンカー研究の内実に変化し、その多様化はいつそう進んだ。

このように欧米圏における音楽学や音楽理論において中心的な役割を果たしてきたシェンカーの理論と分析において、「政治性」というトピックは、シェンカー研究上の死角ともいえるべき視座であるといえる。というのも、シェンカー自身は政治的な発言を数多く遺しているが、戦後に北アメリカで発展したシェンカー分析の担い手たちは、彼のメソッドを広く普及させるために、この種の発言を意図的に排除し、純粋に音楽分析法としての側面のみを活用してきたからである。

ただし、純粋な音楽分析法たらんとするシェンカー分析における傾向は、上述のような配慮から生じたばかりにはとどまらない。この傾向は、「音楽そのもの」を自律的なものと捉える態度と少なからず関連していると考えられるからである。とはいえ、音楽の自律性が19世紀以降に構築された概念であるという認識は自明となって久しいが、音楽理論や分析法がその体系内で完結した、閉じた構造を有した客観的な存在であるかのような風潮への疑問は、シェンカー研究においてはようやく1990年代以降になって噴出してきた。こうした音楽理論や分析法の「自律性」への疑問は、主に以下の2つのアプローチから追究されている。

①音楽理論や分析法を同分野や他分野の思想と関連づけることで、歴史化するアプローチ。

②理論や分析の言葉遣いやイデオロギーに着目し、言説内の矛盾や変遷を明らかにすることで、言説が装っている首尾一貫性や閉鎖性を解体するアプローチ。

(2) 「閉じた体系」から「開かれた思想」へ

音楽理論の自律性に疑問符を付すこれらのアプローチにおいては、シェンカーに関係した理論や分析内部のみを扱う「閉じた」研究は、批判される傾向にある。閉じた研究者の筆頭に挙がるのは、シェンカー著『自由作法』の英訳の導入を執筆した A. フォート (Allen Forte) である。フォートは、そこでシェンカーという「人間」ではなく、「理論」を理解すべきだと主張しているからである。だが、フォートのような明らかな「自律性」論者であれば批判もしやすいが、重要なのは、

一見してそうと分からない論者においても、音楽理論・分析が音楽外の要素から切り離すことができるという信念が拭いきれないことのほうである。例えば S. Clark (Clark, Suzannah, "The Politics of the Urlinie in Schenker's *Der Tonwille* and *Der freie Satz*," *Journal of the Royal Musical Association* 132/1, 2007, 141-164) は、2005年に出版された M. ブラウンの研究書 (Brown, Matthew, *Explaining Tonality: Schenkerian Theory and Beyond*, 2005) をとり上げ、ブラウンが「理論が、[……] 不愉快なコンテキストから自立しているということ」を主張しようとする試みの遺産」に拠っていることを批判する。このクラークの見方からすれば、例えば J. ラッベンの1993年の論考 (Joseph Lubben, "Schenker the Progressive: Analytic Practice in *Der Tonwille*," *Music Theory Spectrum* 15/1, 1993, 59-75) は、それまで光が当たることなかったシェンカーの初期分析法を考察した有意義な研究であるが、分析法のみに注目している点で、理論を自律的に捉えるそのような「遺産」の延長上にあるとみなしうる。クラークは、2005年に出版された『音の意志』の編集者 I. ベント (Ian Bent) や W. ドラブキン (William Drabkin) においてさえ、シェンカーの生きた時代のコンテキストを考える必要を認めているにもかかわらず、フォートのような価値観が部分的にみられると指摘している。

近年では、シェンカーの理論や分析実践を「閉じた体系」ではなく、「開かれた思想」と捉える研究者のほうが多い (クラークのほかには例えば Littlefield & Neumeyer 1992, Blasius 1996, Cook 2007, Karnes 2008)。しかし、このような態度をとる研究者の間でも、「理論」と「政治的思想」の関係をどう捉えるかは千差万別である。例えば L.D. ブラシウス (Blasius, Leslie D., *Schenker's Argument and the Claims of Music Theory*, 1996) は、理論と思想を直接結びつける立場とそうでない立場を挙げている。同じような意見を N. クック (Cook, Nicholas, *Schenker Project: Culture, Race, and Music Theory in Fin-de-siècle Vienna*, 2007) も表明している。他方で、ドイツ史研究の立場からは、シェンカーの政治的思想と音楽理論とが結びつけられていることから (例えば Reiter 2003)、両要素の分離は、音楽学、音楽理論の分野に特有の傾向として捉えられるかもしれない。

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究は、このようなシェンカーの学術上の価値観に言及している言説を、シェンカーの生前から現在まで網羅的に採り上げ、学際的視点を交えながら分析しようとするものである。同時に、上述のクラークのような指摘は、戦前ドイツ語圏で活

動した、シェンカー以外の音楽理論家の思想——例えばアウグスト・ハルム——に関してもなされている (Thaler 1984)。このことから、シェンカーのみならずその周辺の音楽理論上の思想にも着眼することで、20世紀初頭の戦前・戦間期に生まれた音楽理論に対する、戦後の研究者の特徴的な態度の表れとしても、音楽理論における思想性をめぐる言説を考察していく。

3. 研究の方法

1. 言説における特徴的語彙の拾い出し、2. そのデータベース化、3. これに基づく分析考察、の3つを基本的な方法・手順とする。特に以下の点に関して、これらの方法をとった。

(1) シェンカーの政治的発言

(2) シェンカーと方法論上の共通点が見出せうる同時代の音楽理論家の言説や方法、その思想的背景

(3) 戦後アメリカにおけるシェンカー研究文献および各種メディアの特徴別分類

(4) 最新の音楽理論・分析および音楽の物語論の文献におけるシェンカーの位置づけ

(5) 演奏法に関するデータ (指使い等)、およびこれと理論・分析的思想との関連

その他、当該分野の研究成果の発信法の一つとして、関連文献の翻訳 (共訳) を行い出版するという方法をとった。

4. 研究成果

研究成果は、戦前ドイツ語圏に関するもの、戦後アメリカに関するもの、翻訳、という3本柱からなる。年次ごとに順を追って述べる。

(1) 平成25年度

以下の4点の成果を導いた。

①シェンカーの時代の言説の読解を中心に行った。音楽作品の理解や実践の社会的役割という観点からは、同時代のドイツにおける青年音楽運動との関連性が想起されるが、同時代人で青年音楽運動の担い手フリッツ・イエーデ (Fritz Jöde) の理論における「耳に聴こえないものの空間的把握」を考察した論考が、国内の学術雑誌に掲載された。

②また、音楽作品の理解を社会的使命と捉えたシェンカーが、実際の演奏実践を指南する際に、どの程度、理論・分析的思考を反映させていたかについて考察した。これについては、楽譜校訂に関する調査をさらに発展、深化させた論考が、国内の学術雑誌に掲載された。

③さらに、シェンカーの政治的思想を言説全体から網羅的に抽出し、シェンカーが「他者」(の音楽や民族) に言及することで自身の音

楽理論をいかにして正当化していたかについて調査し、アジアの国際学会において口頭発表を行った。「他者」とはヨーロッパ内の他者、ヨーロッパ以外の他者に分けられ、後者はさらにアメリカとアジアに層化されている。そこで、日本におけるシェンカー受容の歴史も同時にとり上げ、関係者等への聞き取り調査等を行うことで、シェンカーのこのような政治的発言が排除されてきた過程や日本特有の音楽理論受容も明らかにした。アジア各国の研究者から、国ごとの受容の違いなどの事実や意見が得られ、今後の共同研究につなげる上で有意義なものとなった。

④一方、シェンカーの言葉遣いを学際的な視座からより深く考察するため、障害学研究と関連づけた上で、分析上の語彙における身体表現(「アブノーマル」や「ノーマル」の区分、「麻痺」等の言い回し)の用法を分析した。これについては国内の学会で口頭発表を行った。

(2) 平成26年度

前年度の研究内容を発展させ、以下の4点の成果を導いた。

①戦後アメリカにおけるシェンカー受容の流れを辿る端緒として、シェンカー自身の理論の不十分な点として指摘されてきた「リズム」のパラメータに着目し、アメリカの代表的なシェンカー研究者たち(カール・シャクター、ウィリアム・ロートシュタイン、フランク・サマロット)のリズム論の特徴を明らかにした。前年度の②に基づき、理論レベルのリズム論のみならず、演奏解釈レベルのリズム論に光をあてることができた。研究成果については、国内の学会で口頭発表を行い、そこで得られた意見に基づいて発展させた論文を投稿した。掲載された。

②前年度に引き続き、理論と音楽外的思想との関係だけでなく、理論や分析と演奏法との関係を探ることも、理論の思想性を捉える上で重要かつ必要であることから、これらの調査結果(主に指使いに関する指示とそこに見られる音楽分析的思考)を国際学会誌に投稿した。研究論文として掲載された。

③シェンカーと同時代の音楽理論家として、本年度はグスタフ・ベッキング (Gustav Becking) をとり上げた。20世紀初頭に音楽のパラメータの視覚化を行い、ヤスパースやディルタイらとの思想的関連がみられながらも、その理論が長らく等閑に付されてきたためである。これについては国内学会で口頭発表を行い、思想的背景を含め広く意見交換を行うことができた。

④シェンカー関連の著書の翻訳を引き続き行い、シェンカー著『ベートーヴェンのピア

ノ・ソナタ op. 111 批判校訂版』の翻訳を完成させ、出版した。この翻訳は、音楽作品の理論的理解を押し進めるだけでなく、批判校訂版をはじめとする各種エディションが作られていく歴史的背景を知る上で日本の音楽専門化や愛好家に示唆を与えることができるものである。また、解題においてシェンカーやシェンカー分析の解説を付すことで、理論や思想に対する導入を提供することができた。

(3) 平成 27 年度

それまでの 2 年間の研究成果に基づき、最終年度として続編となる事例研究を行うと同意に、本研究テーマの集大成となる通史を構築した。その研究成果は、以下の 4 点からなる。

①これまで 3 年間に行った研究を総括し、通史を構築した。具体的には、シェンカー生前から現在までのシェンカーおよびシェンカー理論分析の研究史を言説や様々なメディアを対象に網羅的に調査し、そこに見られる方法論上の変遷と価値観を明らかにした。国内の学会における口頭発表を通して成果を発表した。網羅的に捉えることに主眼を置いたため、今後は個別の事例を詳細に見ていく必要があり、次の研究テーマにつなげる機会を得た。

②前年度に行った口頭発表 (③) の内容を修正・発展させ、国内の学会に論文を投稿した。掲載された。

③招待講演を機に、音楽理論や分析と深い関係性を見せてきた音楽の物語論の最新動向を明らかにした。これらの動向は、元をたどればシェンカー自身の物語論的解釈に由来するものでもあり、またその批判的受容という形もとっている。これについては国内の研究学会においてレクチャーを行った。

④前年度と同様、翻訳作業を続け、シェンカーのピアノ・ソナタ批判校訂版シリーズの最後の著作となる『ベートーヴェンのピアノ・ソナタ op. 101 批判校訂版』の翻訳を完成させ、出版した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

1) Hiroko Nishida, “Editions and Interpretations of Beethoven’s Last Piano Sonatas at the Turn of the Twentieth Century,” 『音楽表現学』第 11 巻、25～32 頁、2013 年。

2) 西田絃子 「フリッツ・イェーデによる音

楽作品論の諸特徴——空間の言語化と視覚化をめぐる」『芸術工学研究』第 20 巻、35～44 頁、2014 年。

3) Hiroko Nishida, “Schenker’s Fingerings in the Beethoven Erläuterungsausgaben,” *Journal of Schenkerian Studies* 8, pp. 49–72, 2015.

4) 西田絃子 「ハインリヒ・シェンカーのリズム論再考——〈構造的リズム〉と〈演奏解釈的リズム〉」『リズム研究』第 15 巻、4～29 頁、2015 年。

5) 西田絃子 「グスタフ・ベッキングのリズム類型論——その思想的背景」『デアルテ』第 31 巻、69～86 頁、2015 年。

[学会発表] (計 6 件)

1) 西田絃子 「音楽作品におけるアブノーマルなもの——シェンカーとポスト・シェンカーの音楽分析にみる身体表現の変遷」日本音楽表現学会第 11 回大会、2013 年 6 月 9 日。

2) Hiroko Nishida, “Legitimacy and Transformation of a Music Theory through the Observation of Other Music,” *The Second Biennial Conference of the East Asian Regional Association of IMS: Musics in Shifting the Global Order*, 2013. 10. 19.

3) 西田絃子 「ハインリヒ・シェンカーのリズム論再考——〈構造的リズム〉と〈演奏解釈的リズム〉」日本音楽学界西日本支部第 21 回例会、2014 年 7 月 12 日。

4) 西田絃子 「人生観のあらわれとしてのリズム類型論——グスタフ・ベッキングとその周辺」リズム協会第 32 回全国大会、2014 年 11 月 24 日。

5) 西田絃子 「音楽／時間／物語」、公開研究会「ゲームのナラティブ／音楽のナラティブ」、「分析哲学と芸術」研究会 (招待講演)、2015 年 11 月 7 日。

6) 西田絃子 「アメリカにおけるシェンカー分析理論の 100 年——方法論の変遷」第 66 回日本音楽学会全国大会、2015 年 11 月 15 日。

[図書] (計 3 件)

1) ハインリヒ・シェンカー著、山田三香・西田絃子・沼口隆訳『ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第 31 番 op. 110 批判校訂版——分析・演奏・文献』音楽之友社、全 247 頁、2013 年。

2) ハインリヒ・シェンカー著、山田三香・西田絃子・沼口隆訳『ベートーヴェンのピアノ

ノ・ソナタ第 32 番 op. 111 批判校訂版——分析・演奏・文献』音楽之友社、全 271 頁、2014 年。

3) ハインリヒ・シェンカー著、西田紘子・堀朋平訳『ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第 28 番 op. 101 批判校訂版——分析・演奏・文献』音楽之友社、全 248 頁、2015 年。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田紘子 (NISHIDA, Hiroko)

九州大学大学院・芸術工学研究院・助教

研究者番号：30545108